孫夫人

四

750
.T2

繪本直指寶巻之四目録

後將軍趙元國之像
大元帥韓信之像
李廣水を渉る圖
同石虎之圖
賈左夫射藝之圖
火々出見尊於宮遊行　二丈

神風伊勢海

阿曇磯良之器

宗持伊賀寿治帝力戦之器

坂戸判官則明勇力之器

安倍宗任義家に仕ふる器

俊約者無差を救ふ

義貞指を力之図

前漢
後将軍趙充國像

後漢趙充國

充國字子翁孫文武に達し弓馬に勝れ才智人に抜ん
温厚にして劉氣長と出で富貴如何に流て廣大の深略あり宣帝の
時後羌軍に拒せ秋宮平侯に封ぜられ神爵元年乃春西戎
中國の要塞を犯す時充國流矢七十餘ヵ所を受宣帝彼が年
若く何ぞ能の大将として向かし難き事易うべしと今い
老衰の身なれば軍事に到る者なれば彼が目利を大
わを定めべしとの仰へ御尤なる事丙吉勅答して居者天下元
将帥をなるに此老わを除るこの旨を以て即日勅命武
下し給へ充國つゝ叩も辞せず某今城の北面戎と対平ぶん事
宜し易し重て彼の要害を考り其地理を詳し彼を対べき計
略を用ゆとうとて曲を記し上り奏ふ以北面の戎軍法と称
陳しける者なれば常日事に到る者と仰候きり多敵乃

様体を早く察し初るゆと勢を進て彼の内に入ると敵し
戦ざるおに倍を義く固ち小敵と侮ぶ怠て懈を謀とぬんでうたの
戒を恵て計とを為て勝ゆと法ふと只士卒と共に苦を分て陣
張し今城の北方に陣を張て陣とされ毎日法卒と食を為て敵く軍を出さ
ば虜は早く勝負を決せんと為ども充國いかとも彼と迎撃せ
逆を以て防ぎ行んとらい出ぬ者なく身をつゝく出ぬとある夜昔かとあ
士卒を捕て充國が家へ引出そう充國其を細と問ふ只教用
ゆる軍の軍れ出ざると矢を虚実を窺ひんがゆゑ言へある充國流れ
而して曰敵は既に待侵きてるとそうくゆりは弱ようとて軍を出し使
急ぐる不意に奇ぶと一度に責入れば敵軍大小同事ぬるとて我を
近の狐ふ大河を流き為て溺れ死とる者れを当て世一戦を平治して凱
陣せりこと後武仕して天年と安く終んん事と法をも事も長法きを也
如いも安れ地を大宅と揚り生と安く乗り宣帝神爵二年八十八歳に辛

興劉破楚
大元帥韓信

韓信

韓信は淮陰の人なり初め呂后の一飯を得て餓死を逃れ市人乃至の辱を忍ぶ高祖人材器を愛し項羽ふるはざるに及び執戟郎となる范亜父の策を信ぜず項羽の人となりを察し項羽亡び登用しかたと再三説きたれども項羽更に用ひざる信も亦楚を棄てまた漢の張良しきりに信ふ利害を説て楚を背し漢中に拓き帝に進む帝これを用ひ軍將となる信ぶ勝利をかちとる大元帥を拜し砂背水の陣法を信ぶ方すより出て奇策乃大軍を破り項羽を滅し帝に天下は一統となる信ぶ戦功りよりて無比の勲を賜ふ

李廣水を渉る

貳師將軍

前漢の李廣利は武帝の命により牧馬の將軍長を辛して大初元年の夏大宛國に貴人く戰ふ時暑熱甚しく水に乏しく て法軍渴ふ及び李廣の子敢を殺き天ふ仰ぐ之歎し腰に佩 る所劒を拔て山石刺るれば天も感ずや精誠と感じ給れ泉 あり忽ち湧泉涌出て一連の瀑となる方幸是に因て勝 一戰に大功をあらはせり李廣は廣い武勇人ふ稱れるのみならず 才識具りて改を能く行い七郡の太守となり禀性朴實に して己を忘れ人に才藝ふかうして故に法人ふ好ひけ新まん事 と好りて西山に深き時あるを陣外に出て自分夜寢しるふ 大なる虎とある指ての弓矢をもて是を射る最明て見れば虎なり あで大石なりとそれを射るられ石と化て立どとなん

賈大夫射藝

晉の大夫叔向の妻は容貌醜く才藝に富び事に上世に賈氏の 大夫宮奥に居るを以ず醜し妻を娶に絶世の美人なり是乃容貌の醜さを 忘れ嫁して三年に及べども未だ一言と交ず一度も笑ひ 事なし或時妻と共に車に乘て車に乘ふ赤賈大夫門かり 門者に成事を拒て決り約束を射る子を見て彼書を 知いものとして是射藝乃者に問て書れ如と請い感ず之 なる事なりと決して主人に告ぐ主人初めは疑ふ類せるもあり之和 物語ふ或人妻をひとりの美人なれども為りて終に地位の事 まうらとみ果て赤拙にはさ赤媒人乃方へ送り使をして夫も対そし 約しが決をこの旅まと見て拙ふ不のうにく対そう書赤拙のはう 古紙をうとてはくでうみやれ

物いひ、又そを猫乃人柱雄も呼とばうとれまでもの様
四、孫じ、ゆへあれば、又大に地どろれま遠ゝ様ひ、ゆり、支婦乃ちぎり
清四乃ざうけと仏女い由ある人のよなしゞ其又一言の過ぎく今様考ひ
あるよう口い猫の門乃ゝとゝ孫古言と云い悔て地ゑゞりしゞ雄乃
四乃智に在あそ乃ゝ社て雄ゝき者を角に志ゝくしあのれそ
我志ゞ四ゝい孫ゞ一也雄よ乃婚姻によりき不得あるゝ古ゝ
へゝり和漢ゝも に用い来わり婚れの様様よ重乃と名付て雄と
一ゝ四乃偽りゝとゝ又雄よ乃夜い雌雄一不ゝよりゝ意は別ゝに
所る必ゝ志旅乃雄乃を意乃様乃智を意乃婚乃様乃呼と
いゝり乃持の弁ゝり

春の野にあさゝ雄よ乃書ゞひゝり

そのゝあり乃ゝ人ゝり志様ゝく

大ゝ出見る様家様様
地神乃代鸕鷀茅葺不合尊乃御父尊ゝ出見るとゝ申ゝ
擅ゝ杵尊ゝ御ゝなり御兄を火邪芹るとゝ申ゝ尊火ゝ出
見る事ゝ優にゝ事ゝくゝ有ゝ或時御兄乃鉤を借ゝひ
海中ゝ魚乃ゝ釣ゝ尊火ゝ借ゝ様ゝにより佩ゝ様ゝ刀にゝ釣ゝ
鉤を作ゝひゝ無ゝ釣ゝ尊ゝ邪芹ゝ考ゝ来ゝ不悪
に御ゝ申ゝ故ゝ本ゝ鉤の鉤と返ゝ申ゝ事ゝ作ゝ申ゝ頻
なり尊火ゝ出ゝ人ゝ事ゝ憂ゝ海畔に佇ゝひゝ御塩土翁ゝ逢
たゝ事ゝ申ゝ人ゝ事ゝ憂ゝ海畔に佇ゝひゝ御塩土翁ゝ逢
尊ゝ申ゝ次第ゝ様ゝ作ゝ翁ゝ申ゝてさのゝ憂ゝ申ゝ様ゝ表の
にゝ作ゝけゝ籠ゝ申ゝて無目籠ゝ作ゝ事ゝ籠の中に入ゝ申ゝの
者ゝ教ゝ海ゝ流ゝ申ゝ乃ゝ海ゝ乃ゝ中ゝ小ゝ行ゝ様ゝ小ゝ魚ゝ

びい濱ぢをしひて歩こ給へば、ゑら海神の宮ゑ到りぬ。其の構を見ぬへば、ゑる百姫蝶きゝ多れ葉樹元羅き在巖珠玉ばちりぢあ角り門前ふ一ゑ乃井あり井の上に枝ふ茂り之ゑ湯は杜の樹ありゑ末乃下に行き居ゑ玉の袂を世ゑ新ゑれ元女乃牧多の侍女を仕き来りて水を汲んと珠しゞ作く尊と見ゑり対元り驚きいぬ乃り為ぢ立帰り又新玉に申くと仕げゑれい新玉やゞて供を遣りしゑを待ど未除乃為ゑと問ゑれば乃ち我ゑ天乃神の孫なり去ゑくの事にてゑゑ来ゑりゑ作あれば海新玉大に恐れ新い八を乗を設けさゑく感先ゑ乃ち法の魚どもを仕どい集め海の幼稚と食聲しゑるに赤女といふ魚乃ゑあゑしを求め出け新公時海神玉乃御ゑきくを感先ゑ乃ち豊玉姫を御使所ゑまつり第ゑ乃ゑいんとれく海神天に参りゑ事説ふ三年にそゑび古ゑ紙ゑれゑ乃御情ゑ乃ゑ事ゑとゑ社ゑんゑと願き告給へば豊玉姫又に申くと語り為新玉乃御あに乗り海を渡り御事みて天孫乃初ゑ面へ海除しゑゑ申ゑ乃為ゑ緑と云へ高野雅しゑ乗りまたくを送りまゑ参しとゑる面の鶴を乗り又潮満潮の玉紙投げゑり見ゑ乃ち海まさび潮満ゑて潮し潮干ゑて敷い悩しゑて自ら供し給い給い紙ゑ乃ゑ天ゑ乃下を去りゑゑゑ乃べと新へ祝しゑる乃いゑを告て云ゑくんと云ゑ時ゑ玉姫のゑゑ紙をでに去の

沖ふを怒濤浪風甚き日を待く君乃御祈ふ給て御ふを
を產ゞ海邊に產屋を造りて待のと給しのふるを
八重の波路をわたて來る者系の文に書り給つりをのら
風激しく浪甚き日ありをれば乃ち船出
さ社海邊に產屋を設命乃ち羽毛屋根をあき葺
いまゞ葺合せ居るに豊玉姫妹の玉依姫を伴ひ大海に
來て産りのゝ産屋に入御産のとき産のよまゞ豊と葺
合せ居ふを出生給ふ故御名を彦波瀲武鸕鷀草
葺不合尊とゝまる是人王第一代神武天皇乃御父に
て御ふ給ふそれより神乃御末連綿して絶ず流り人る代
稱なし竹の巻の末系まで巻ぬがいしを實り
さる事ゝ文人多ありがゝを社

神風伊勢の海

神武天皇日別命に勅詔ありて東の方に夷國あり海渡く
海山谷ゝ多の物命をうけ給つり系に八年数百里ありて
國あり其出ふ神あり名を伊勢津彦と云日別四方日海ゞ國
地天孫ふをんや云て云去此國を求給ふ別事久し教命
命に海ゞとゝ云日別大に怒り天色を拳て討んと怒り
乃ち故伊勢津彦畏れ仕し給して云容國ゝ〻を天孫う
奪りこの永く此不に居ゝゞ日別又向て日海ゞ去の時何を以て驗
こせんや云て云去今汝をもて八風と起し海水を揚浪に奇ゞ命
東に行べし是即ち吾去の時也ゝ日別色を驚くこれと家ゝ中夜ゝ
乃ち此大風四方に起て波深を揚給ゝて光耀東大陽のごく
海渡ゝもて明ゝ多不波ふ奇ゞて東方に去りとかや

武内大臣

河内磯良
干満の玉珠をたてまつる

宗頼討伐の事 寿次郎 幸

天慶の比為朱純友謀叛を起し、舎弟純志は黒沢の城に籠り、討ひ立れ
て小野好古羽柴源満仲と共に攻ふ伐る実に純志が為ふ伐る
寿次郎しよ大力無双の者也味方勝軍はやとうんでいで一軍して
面々にうを退散して見ると八人隙りの後陣を拵へ大張行
華のごく輝くうち勢ひ中に云人もすくなく八方高山に手伏荒立ち
のうちに此八騎を討捕れば此勢ひよ低易して恐れて討出もせざるを
たばつ宗頼と云者あり源良ご振義と見て天晴勇士ごさんれ討れてそ法せ
が中法純を合せてうち来り源命及の四郎源三郎の子ふ宗頼ご
中剣一筋あり立て大音揚て呼りれば源命ちとうて言の矢ととて是が
強に書く程のすはほどにふで射て立て出へうり切れを試ふんと二重
立にでうりるを山場に歌の意言るりが張て強ふと云ふ人人

紙の丸木のうに年白の尖矢を引加へ射れどもく蓑の毛れずく
わ矢ごと一矢も裏へ四ぐうりうきふいらつく射れにのとうふんう
の強ふんと仰ふある源命ものうりるはいらるはうるが運命も尤までと
いひも果ども人俗りの大力ふ振三三に対て叫ろを山遠ず体の
うちのうそのご優月力なんどと者よごく強つ流つ叫二人すが外で戦いる敵
味方の兵ども前代未聞と見物と内はを春で居うちう源良流で馬乃
法勝薙名れいるハ序凡を例とぐぐく者山るとて流へどを山遠ふ名れ義
きるご之来ふ利ろるもれの勇士るれば強ふ名れ抜射一次良ご甲の三四と
胄も弾と落りにこす外所也名れぞ三もの源ひうれば
目も入れ絶叫をてようが入れを者を山引組でれてはを人胄掻ゆく大力の
弾と者ふ名祢と者へうる伊ふ者源命及弾と者山た強つ宗頼ご対捕うとう対
に呼りてはう方れ強へ入るハ強ふ弟く表働なり

坂戸判官州明馬を奪ひ来
給ふ所将軍源朝臣義朝の八幡大菩薩義家奥州の安倍
貞任を責め給ひし時兵粮運送の役新渡しの官軍
敗北して乏しきに伊豆の坂戸郡の住人則明加茂宗通大宅太
郎首級を獲て来る所七騎にて国府へ向ふ宗任が
臣下の良等大義四業近将軍伊豆の国を討捕まんとて
其勢二百騎にて馬煙を立て追掛り七騎の者
迫し合せ多勢に引懸く敵ひしめいて将軍の
御前に大事の策を案じ奉て業通進まつて業近
が弟友三業信が方へ奪ひ取て軍を系まり又敵陣へ
入をる者に義家朝臣の御馬も流矢のあふ射られ仆き
給へば則明古郷を立て出でられく進ぜんと大をしろげく

まつる矢に付しくんぬ物具さいやれ猛る武去華毛の馬の
なをく逞きに系ゆるあり則明手見てあつぷれ強き武さん
るれ迷下て八幡宮に進せよ此芳志に汝が命い助命ぬ
さんしいば彼者大ふ悦ろく一文字に対て無るを則明
かいぐろく後に理り大乃男の上帯ほうんで書よに捉ぎ
いく往るの口を取て引ゆんとしく紙ば彼ぎよ乃去ども
ふと付せどと十二三歩ろされを並べく色無そう則明
ふり返りて和そ汝らい此者の命と救りんとて暴ぎちぶ
也し得させんしいみまくに彼男を引しあぎ矢ぎ彼うあて
ら材みぎぐり抱を紙ば起を上でれしたりあは追を乃
去ども彼れをそそそ弟力に恐れてやろく和てゆりる則明い会
のみると奪のれ八幡宮に進せ奉ぬ激ま勇く義御ぬり

安倍宗任仕義家事

大江匡房々ゝ累代儒家の業葉を受継ぎ多識はして風月すに富詩歌管絃の道もゆさしく勝れ玉芝軍術に通じ文武両道に昇進あり海上員出られ逆人を生ずること或日八幡太郎義家宗任に候ひて奥州軍の物語せられあるに初め匡房つも寄て色てけくしは物語をお聞義家賢く良武なれども軍の道よハ為無なりと猶言に宣いしを八幡殿の石具せられ安倍宗任は越に是は我君行乃人をるの免ふ物のみ人れとゆとゆだ思ひ給ふ為なる程に八幡殿出なへば宗任仍行くちくの由をゆかれ嗚呼の事とのもをちへば新そさんも仍りに猛侯なり宗任みれ行者のひ祈を

所んと云ふ八幡殿大に勅し給ひある程ひ代の宗任ゆ家や実ふ事をあんん究賢を骨にゆりを加ひ義家ゆ云ふ細ありとてとうそ免ゆふへ匡房ゆ出ゆし車ひ寄さ事ふんとし給ひしを八幡殿近ふ対文に含釈しゆへば宗任をゆるざる事と云ふ不奥ふゆて猶たゆ所ふ所ふ後八幡殿匡房卿の門弟ふと成て軍術を励ふゆ義家ゆ国より為帝人にまし給ふ仍ひ結句其人れ弟ふ為ふて乃を仍ひ給ふ事ありゆ云ふ為将の不為ふ事ゆやゆ学問乃かふて深く思ひ合せ事も事も事ふ匡房の一言を宗任ふ語ざりせば危き界も多ふ見ゆ泳ふ良者い接べき去なりゆと感じあふりふとうん

金ワラジの其紐ゆるびて山四とをふのうれて れーうごも出行みとをとほうとそ十か
能美家に帰ることて 能久れが和に甲斐なたやり和うれいそで行ることぐーて
男ちぐきぞ悔ひる男とれ陸をーそんでそいのりまあ

軍中に兜を脱いだ加茂次郎義房が礼服の兜と脱ぎ捨てし八幡大菩薩の御神の兜を脱ぎ捨て義房ひ場にて兜をぬぎひとゑづきの事あるなりけり

かるがゆゑ
今改めて
畧す

新田義貞指南力

新田義貞稲村が浜までおしよせ給ふに敵の陣を見るに一方は山一方は海なぎさうゆきかたもなくさうめぐと志ゆく引ひけをきはんとうかんをるわ物ゝ波みちて通る事よこ矢ゆいさはんとうかんをるわ物ゝ波みちて通る事あるいはざるしうば義貞馬ようをうちいれ海上とうつ物ゝ弦神へ願ひ給へ弦神へ願ひ給へ弦神へ願ひ給へ弦神へ願ひ給へ

海中へうげうをまつる弦神納受やしうひん常しゆる事うれ稲村が浜古丁仏手あぐり横矢射んと構へる弦

浦よりさてつれくるうの沖にそでよつて義貞ありがたく思ひすぐやかにそこを下知やれくをば敵方弱の矢をもくと弦金人責へ伸くりいくさに打勝うとや